

# THE WEEKLY NEWS OF FUTTSU-CHUO

人類に奉仕するロータリー  
Rotary Serving Humanity



活動するロータリー  
Rotary Acting

国際ロータリー会長 ジョン F. ジャーム 2016~2017 富津中央RC会長 榎本 守男  
国際ロータリー 第 2790 地区 富津中央ロータリークラブ 創立:1966/10/13 加盟承認:1966/12/12  
RI D2790 FUTTSU-CHUO ROTARY CLUB Organized : Oct./13/1966 Chartered : Dec./12/1966

## No.2464 第18回例会 2016. 12. 8 晴

点 鐘 : 榎本 守男 会長  
進 行 : 栗原 典子 副 SAA  
ソング : 奉仕の理想  
お客様 : 藤倉 富二夫 様

### 会長挨拶

榎本 守男 会長

皆さん、こんにちは。お客様の紹介をさせていただきます。本日卓話者の藤倉富二夫様です。



夏のマザー牧場でのバーベキューに来ていただき2次会までお付き合いいただきました。その節はありがとうございました。本日は師走の忙しい中、お時間を頂戴し有難うございます。詳しい紹介は後ほど白石幸久会員よりして頂きます。

12月3日の富津シティークラブの創立25周年記念例会・祝賀会に多くの会員の皆様と一緒に出席してきました。記念例会に出席し、あれからもう25年の時が経過したのかと、あらためて時間の流れの早さに驚いています。ちなみに富津シティーロータリークラブは1991年11月20日創立総会を行い1992年1月13日2790地区73番目のクラブとして加盟、認証されています。今回の記念例会もコンパクトでフレンドリーな手作りの温かさを感じました。富津シティークラブ鳥海初代会長が当クラブの25周年に際し

「祝25年・そして感謝」と題して寄稿された中に川端康成の「恋愛は希望に生き、友情は記憶に生きる」との言葉がありました。これは富津シティーロータリークラブが将来に亘って記憶に生きるべく、年度テーマのWA(和・話・輪)を大切にしたいとの思いから寄せられたのではないのでしょうか。ならば出典の本を読もうと検索したところ「花束の時間」という作品の中にこのフレーズがあるという事にたどり着きました。しかし、川端康成「花束の時間」のワードで検索しても本が見つかりませんでした。会員の皆様でご存知の方がいらっしゃいましたらお知らせください。検索ついでに以前私が卓話で取り上げたニーチェの名言の中で友情、恋愛を調べてみました。ニーチェの言葉は活力を生むドリンク剤だと言われています。多くの事に気づきを与える言葉がありましたので紹介します。

### 友情

隣人を自分と同じように愛するのもいいだろう。だが何よりもまず自分を愛する者となれ。

### 恋愛

愛が恐れているのは、愛の破滅よりも、むしろ、愛の変化である。復讐と恋愛において女は男よりも野蛮である。夫婦生活は長い会話である。恋愛とは短期的愚行。結婚生活とは短期的愚行にピリオドを打つ長期的愚行である。愛からなされることはいつも、善悪の判断の向こう側にある。

少し長くなりましたがニーチェの寸鉄の言葉を紹介して本日の会長挨拶とさせていただきます。

〒293-0043 富津市岩瀬 841-3  
いち川旅館 Ichikawa ryokan  
841-3 Iwase Futtsu-shi Chiba-ken,  
Tel. 0439-65-0177 Fax. 0439-65-0178  
URL <http://www.futtsuchuo-rotary.org>  
Mail [home@futtsuchuo-rotary.org](mailto:home@futtsuchuo-rotary.org)



## 幹事報告

渡辺 哲夫 幹事



1. 第40回 R.Y.L.A セミナー開催案内及びロータリアン・青少年の参加について依頼がありました。(回覧) 日 時:平成29年2月25日(土)、26日(日)9時～16時  
場 所:国民宿舎サンライズ九十九里  
参加費:一人 15,000円
2. 一般社団法人比国育英会バギオ基金から、2015年度事業報告書の送付と基金へのご寄付のお願いが来ております。(回覧)
3. 上総RCより例会変更及び休会のお知らせが来ております。(回覧)
  - ・例会時間変更 平成28年12月22日(木)点鐘18時、場所 山徳旅館(例会場)  
理由 クリスマス親睦夜間例会
  - ・休会 日時 平成28年12月29日(木)  
理由 定款第6条第1節(C)項
4. 君津RCより例会変更とクラブ週報が届いております。(回覧)
  - ・例会時間変更 日時 12月19日(月)点鐘18時、場所 ホテル千成(例会場)  
理由 夜間例会(会員家族親睦忘年会)
  - ・休会 日時 平成28年12月26日(月)  
理由 定款第6条第1節(c)項

### 連絡事項

- ・ 新会員推薦のご案内を送付させていただきました。異議のある場合につき7日以内に書面をもって会長まで申し立てして下さい。なお、理事会のメンバーの皆さんには送付しておりません。
- ・ 木更津総合高等学校より、第98回全国高等学校野球選手権大会出場支援のお礼として、甲子園出場記念飾皿が届きました。

## 木更津総合高校野球部後援会への寄付に対する返礼の品



## 委員会報告

### 50周年記念慰労会について

高橋裕之 50周年実行委員長

50周年記念慰労会を下記のとおり開催いたします。

日時 12月11日(日) 開宴 17:00

場所 金谷 かぢや旅館

会費 会員 5,000円 ご夫人 3,000円

配車についてはあらかじめ決めました。(割愛)



### 50周年記念誌について

須藤 隆 記念誌編集委員長

先週、50周年記念誌編集委員会が開かれ、記念誌の編集方針について話し合い



を持ちました。全体の構成については、式典をプログラム順に構成し、それにクラブの沿革、50年の歩み、歴代会長・幹事、地区役員の名簿に加え、さらに会員紹介を掲載します。会員紹介の形式をどのようにするか様々な意見が出ました。その結果、それぞれの顔写真を載せ、それにプロフィールとして生年月日、入会年月日、職業(または職業分類)、自己PRとして、趣味、性格、座右の銘等を各人に記

入していただき、さらに全員に一人60～200文字程度の一言を追加していただくことになりました。その内容は「ロータリーに思うこと」、「私の家族」、「私の趣味」、「私にとってのロータリー」等々があげられました。それと、ロータリー歴20年以上の人にはできるだけ「ロータリーの思い出」を800文字ぐらいで投稿してもらおうこととしました。もちろん20年未満の方の投稿も歓迎です。原稿の締め切りを1月19日(木)としますのでご協力をよろしくお願いいたします。

## お客様紹介

白石 幸久 会員

白石会員より、近隣に住み、日頃ロータリーにも関心を持たれているとして藤倉さんが紹介されました。



その主なプロフィールは以下の通り。

法政大学法学部政治学科卒

自治大学校税務専門課程特別コース終了

千葉県庁奉職

著書 「上総地方の言葉」、「謀反人たちの真相」他

趣味 マラソン、読書

## 卓話

### 方言について

藤倉 富二夫 様

#### 1. 自己紹介

私は「藤倉富二夫」と申します。ドラえもん原作者のような名前なので、すぐに覚えて戴けると思います。戸籍上の「ふじお」の「ふ」は、富士山の「富」ですが、通称は「ウ冠」ではなく、点なしの「ワ冠」の「富」で通しています。と言いますのは、名前の由来が我家の家系の中では比較的立派な人だったとされている曾祖父の「富吉」という名前の一字をもらって、母の兄が「富二夫」



とつけてくれたそうですが、届けた時に、役場で誤って頭に点を打ってしまい、戸籍上は富士山の「富」になってしまったようです。

子供の時から、親からお前の名前は「ののさん」からもらったものだからと言われ、点なしの「富二夫」で生きて来て、高校を卒業する時に謄本を取って、初めて自分の本当の名前を知ってびっくりしました。このことは、両親も知らなかったようです。

## 2. 昭和30年

昨年還暦を迎えた私は、昭和30年生まれです。

野球でいうならあの江川卓、相撲界でいうならこの夏に若くして亡くなった千代の富士、歌舞伎界でいうならこちらも先年若くして亡くなった中村勘三郎、芸能界でいうなら郷ひろみ・野口五郎・西条秀樹のいわゆる新御三家や、アグネスチャンや麻丘めぐみや、キャンディーズの三人娘の真ん中の年のミキちゃんが同年代になります。かつてのアイドルも既に60歳を過ぎました。昭和30年というのは、終戦から丸10年目に当たり、20年代とはやや異なる、極めて微妙な年回りになります。前年にはゴジラの映画が封切りとなり、翌年には経済企画庁が「もはや戦後ではない」という有名なフレーズで経済白書を発表し、戦後日本の節目の年ではなかったかと思います。私は、昭和30年生まれと29年生まれの1級先輩との違いをよく次のような例え話で説明します。

私は、1学年に1クラス25人の2クラスしかいない小さな、当時の大佐和町立吉野小学校出身ですが(ちなみに大貫町と佐貫町が合併して大佐和町が誕生したのも昭和30年、自民党が結党したのも昭和30年です)、その吉野小では29年生まれの人たちが1年生の時に給食室ができて、給食が始まりました。ですから1級先輩の人たちは、数カ月間ながら学校に弁当を持って行った経験がありますが、私達にはありません。そして、当時吉野小は、クラスの呼び名が、1組2組ではなく、松組・竹組でした。そんな話をすると、いつの時代のどこの国の話だ?とよく笑われますが、その松組・竹組が1組2組になったのが、私たちが6年生の時なので、1級先輩たちは、今でも同窓会の時に、「おら、6年の時、おめといっしょだったっけ?松組だったっけ?竹組だったっけ?」

といったような会話をしているはずですが、しかし、私たちは、卒業年次が1組2組だったため、松組・竹組意識はかなりセピア色になっています。また、当時の大貫中学には、教室に時計がなく、冬にはストーブもありませんでした。そんな田舎中学に、時計が付けられ、ストーブが設置されたのが、私たちが3年生の時でした。そして、昭和30年と29年の極めつけの違いは、検便です。私達は、小学校に入学した時から、検便の時には、密封性のある専用の容器が配られましたが、1級先輩までは、マッチ箱、たぶんあのパイプの絵のついた深い形のマッチ箱に入れて持って行ったはずですが、今でも、私の従兄が当時のお話として、教室でそれを提出する時に、中身をポロリと落としちゃったのがいてな…と、笑い話のように言います。きっと、同窓会では、今でも1つ話として盛り上がっていると思います。

### 3. 方言の自覚

と、こんな時代を過ごして、昨年還暦を迎えた私たちは、昭和37年に、1学年に50人しかいない田舎の農村地帯の小さな小学校に入学しました。ほぼ全員が、同じような環境で育ち、同じような生活をしていましたから、家に居ようが、学校に行こうが、「普段使う言葉に気を使う」などという意識というか、概念といったものはまったくありませんでした。

ですから、みんな、「おらがかん、学校までやんで来っと、ちょうど1時間かんだよ。」とか、「へーはちがでてきたかん、へーたたいで、ふっばてたたら、びが出ちゃった。」とか、「今時分、そんなかっこしてたら、ふうがわりっぺ。」「あーんが、あんも、ふうがわりおたねよ」といったような会話を、何の違和感もなく繰り返していました。

しかし、中学進学に当たり、とりあえず環境が違うと思われる別の小学校出身の人たちといっしょになるに際しては、しかも当時の吉野小と大貫小とでは、規模が1:2から1:3ほどに違う上、一般的には大貫の方が町場のイメージがあったので、とりあえずは、標準語を使った方が良いのではないかと子供ながらに構えて校門をくぐったものです。

ところが、その合流した大貫小の人たちの方が、はるかに荒々しい漁師言葉を使っていました。時を置

かず、元の木阿弥で、会話はまったくの地元の言葉に戻ってしまい、双方が同化されてしまいました。

次に、高校進学に当たっては、舞台が当地と比べてはるかに都会と思われる木更津で、大貫中出身の私たちは、3月の卒業式前に床屋に行ったばかり。まるでマルコメか珍念のようなクリクリ坊主頭で、更に真新しいピカピカの革靴をはいて、コチコチになって校門をくぐるわけです。

ところが、木更津出身の連中といたら、頭は長髪で、靴は運動靴といったラフないでたちで、しかも女子ともごく普通に話しながら、何の緊張感もないように、元々ここはおらが学校、とでもいったような余裕の表情で入って来ました。

こっちにしてみれば、木更津の連中は、1中も2中も3中もない。みんな一緒に見えて、とんでもない勢力と一緒にあったといったような印象を受けるわけです。木更津出身の女子なんかは、まぶしくてとても話なんかできるような状況にありませんでした。初めはろくに口もきけず、高校に入ったら、今度こそ言葉を改めなくちゃいけないだろうなと思いました。

ところが、慣れて来ると、木更津の連中もみんな「ペ」言葉を使っている。天羽や富津や君津の連中に至っては、自分たちとまるっきり変わらない。久留里線の連中だって同じ。違うのは、九州などから越してきた連中だけだということがわかりました。

そうなる今度は、逆に九州なんかには負けられないと変な使命感を持って、結局は元の木阿弥で、また今までの言葉に戻ってしまいました。

次に今度は大学に入ってからのお話。今度は、本当に全国各地から集まった人たちと、しかも東京のど真ん中で過ごすわけで、今度こそ、標準語を使わなければならないなど覚悟を決めましたが、ここでもまた早々に、軌道修正がありました。

クラスの自己紹介で、市原市姉ヶ崎出身のしかも高校の1学年先輩がいることを知り、早速その決心が、揺らいでしまったのです。

またあるとき、学校の掲示板で連絡事項を確認していると、何やら後ろの方で、どうも懐かしい違和感のない上総言葉が、何の憚りもなく大きな声で聞こえて来ました。

東京のど真ん中でそんな言葉を使う奴がいるのかと、振り返ってみたら、青堀出身の高校の同級生でした。「あんだ、おめか」と、ここでも、また変に地元言葉に自信をもってしまいました。

次に今度は、就職してからの話。一応県庁に入ったとはいうものの、最初に配属されたのが木更津の出先だったので、初めこそ緊張はしたものの、職員も大方木更津近辺の人が多かった上、来庁者と言えば、もちろん地元の人がほとんどですから、私の社会人としてのスタートもまた、地元の言葉で始まり、またどっぷり漬かってしまったわけです。

以後は、県庁本庁へ転勤しようが、館山へ転勤しようが、船橋へ転勤しようが、この言葉は、自分のアイデンティティーに違いないと割り切って、退職するまでどうとう地元言葉で通してしまいました。

#### 4. 本執筆の動機

私は、30代の後半に千葉県史、千葉県の歴史を作る財団法人に、庶務担当として派遣されました。

18年をかけて、県史51巻を作り上げるというかなり中身の濃いプロジェクトでした。中には1000頁を超すボリュームの巻もあり、その内容たるや、いくら貴重な資料ではあっても、素人が読みこなすのはかなりハードルが高いものです。

膨大な投資をしていくら貴重な作品を遺したところで、ごく限られた人以外それを読む人がいないというのでは、何とももったいない話で、もし「民俗」の分野で、しかもそれを「方言」に限ってみたら興味を持ってくれる人が少なからずいるのではないかと思ったのが、方言集を出す気になったきっかけです。

しかしながら、私は、語学を専門に勉強したことがありません。専門家の先生に指導を受けたことも、伺いを立てたこともありません。

ですから、私の成果品は一応、本という形はとっていますが、まったくの独断と偏見を取りまとめたものに過ぎず、学術的な価値は当然ありません。

もしかしたら、我家の一族だけ、極端な場合は我家の両親だけが使っていた言葉が含まれているかも知れません。

また、逆に方言に違いないと思って使っていた言葉が、広辞苑などの辞典類を調べてみると、由緒あ

る語源を持つ言葉だったりすることがあるので、私の本は、「上総地方の方言」とはせずに「上総地方の言葉」とした次第です。

例えば、当地には年配の人たちが使う「まんごもん」という言葉があります。耐久性のある、しっかりした造りのものを意味する言葉で、建物などであれば一代限りのものではなく、子々孫々にまで渡って維持されるような立派な建物のことを言います。

そして、この「まんごもん」の「まんご」とは本来「万劫」で、元々は極めて長い年月を意味する仏教用語から来ています。それほど長持ちをするようなものといったような意味合いの言葉です。ですから、この言葉は厳密には、方言ではないと思いますが、そんなことを付記して拾ってみました。ところが、ある先達の方言集には、この「まんごもん」が「永久的に保存できる貴重な品物、孫子の代まで伝えられるもの、孫物？」と説明されていました。この著者は大正生まれの人で、昭和27年に始まり今も続いているNHKラジオの「昼のいこい」の農林水産通信員を長く務めた人で、その道ではかなり著名な方ですが、何故か説明の最後に「孫物？」と付記してありました。たぶん、音からの連想でしょうが、それほどの人が、何故辞書を引かなかったのかと不思議に思いました。言葉に疑問を感じたら、億劫がらずにとりあえず辞書を引いてみると意外な発見があって面白いです。

#### 5. 基本的特徴

ところで、当地域の言葉の最も象徴的な特徴は、「k」音の脱落ではないかと思います。朝起きる→朝おいる、ボタンを掛ける→ボタンをかえる、花が咲く→花がさう、汗をかく→汗をかう、運動会のかけっこ→運動会のかえっこ、などの用法です。「早く片づける」は→「早うかたつづえる」となり、これはk音の二重脱落となります

これは、かなり有名な特徴らしく、早くも、江戸時代中期の儒学者の荻生徂徠が、既にその点を指摘していたそうです。荻生徂徠は、若い頃、上総の、本納(ホソウ)村(現在の茂原市)で学問に励んでいたということですから、あるいはそんな発見をしたのかも知れません。

又、当地の言葉には、「何」という言葉の頭の「N」

音が欠けるという特徴があります。「何でもかんでも」が「あんでんかんでん」、「何とかしなくてはならない」が「あんとかしねばおいね」とかの音変化です。

飲み屋で仲居さんに「あんでんもってきてくんなよ」と言ったら、意味が通じなくてなくて、「餡子」を持ってきたというような笑い話もあります。

このようなたぐいの当地方の言葉に独特と思われるような基本的特徴をおおまか8つ拾ってみました。

私の本の体裁は、基本的にはアイウエオ順に整理してありますが、そのうち語源らしきものがわかるモノには、その語源を、また8つの基本的特徴に該当するものには、その特徴に便宜上番号を振って分類してみました。

また、小説などを読んでいて、その中で、当地域で使われているのと同様な言葉が出てきた場合には、その文章を参考事例として引用してみました。

中でも、明治時代の歌人で小説家でもあった「長塚節」の「土」という作品から、最も多くの事例を引用させていただきました。この小説は、茨城県の結城地方の貧しい小作農一家を中心にして、当時の生活様式や風習などが、その会話にあらわされる方言と風物を通して詳しく描かれています。

夏目漱石は、この作品を読んで「自分の娘が年頃になって、音楽会がどうだの、帝国座がどうだのと言いだしたら、是非この作品を読ませてみたい」と言ったそうです。

この物語は、漱石とほぼ同じ時代の作品ですが、これが本当に同じ時代の日本かと、目を見張るほどの極貧の生活が描かれています。

そしてその貧しい農民たちの会話の中には、当地でもつい最近まで使っていた言葉がおもしろいように出てきます。

また、その小説と並んで、私は山本周五郎の「青べか物語」からも多くの事例を引用させていただきました。この作品は、山本周五郎自身が暮らしたこともある昭和初期の浦安地方の様子を、当時の風俗を写実的に描写した作品です。

この物語は上総の隣が舞台の話ですから、やはり当地でもつい最近まで使われていたような言葉が次々と出てきます。

このような引用法は、前作でも使って来ましたが、昨年出した続編では、言葉のニュアンスを分かり易くするために、更に実際の使用事例も例示してみました。

## 6. かってぼ

その中の1つとして、平成になって聞くことが少なくなった「かってぼ」という言葉があります。何か、意にそぐわぬことが起きた時に思わず発する言葉で、いわば感動詞のような言葉です。

しかし、この言葉は厳密には、現代の分類でいえば差別用語で、本来は、ハンセン病患者のこと、もっと分かり易く言えば、らい病患者のことです。

語源をたどれば感染を恐れ、生活圏の片隅に追いやられた「傍居坊」とか、山際に住むことを余儀なくされた「山傍居」といったような意味合だったので、いつしか語源もわからないままに感動詞化したものと推測されます。

父から聞いた話から一つ。たぶんテレビが普及する以前の話です。ある人がラジオの天気予報を当てにして農作業を予定していたところ、あいにくその日は雨が降ってしまった。その人は天気予報がはずれたことを悔しがり「かってぼえ、ラジオんちきしょうが、うそかしやがった！」と言って、そのラジオを投げつけて壊してしまったとか。そしてもう一つ、病気、たぶん中気、今の病気の分類でいうなら、脳梗塞とかの頭の循環器系の病気で、半身不随になった人が、「からかってぼ、あしんちきしょうがいうときいやがらね」と、足が自由に動かせないことを自虐的に嘆いたとか、ということです。

## 7. かまぎっちょ

ところで、この会場には私より先輩の方が大分いらっしゃいますが、「かまぎっちょ」という言葉を使ったり、聞いたりしたことのある方はいらっしゃいますか？使ったり、聞いたりしたことのある方ちょっと手を挙げてみて下さい。

それでは、何という意味で使っていましたか？ どうもありがとうございました。「かまぎっちょ」の用法には、不思議なことですが、何の関連性もないようなトカゲ派とカマキリ派があるそうです。そして、このトカゲとカマキリの混乱は、長年に渡って民俗学の柳田

国男や、方言学の東条操というエライ先生方まで悩ませ続けて来た難物ということです。

昭和の終わり頃から平成の初めにかけて、25年ほどかけて、駒沢女子大学の先生が、館山を初めてする安房地域からスタートして、富津・君津・木更津・市原から千葉・東葛を抜け、ぐるーっと東京を回り、神奈川へ入って、三浦半島の突端まで、東京湾沿岸をぐるりと、調査した結果、「かまぎつちよ」の「トカゲ派」61%、「カマキリ派」39%だったということです。結論的に言えば、方言に正解や不正解があるわけではありませんが、「かまぎつちよ」は本来は「トカゲ」の通称で、「カマキリ」の呼び名としては、誤用だということです。

昔から、この東京湾沿岸では、かなりの広範囲に渡って、トカゲのことは「カマギツチョ」という統一の通称がある一方、カマキリについては「さるぼー」とか「はらたち」とか「いぼった」とか「かんきり」とか、地域によっていろいろな呼び名があったらしいです。

しかし、すでに江戸時代中期には、ある学者、越谷吾山(コシガヤゴサン)が「物類称呼」という5巻にも及ぶ方言大辞典を編纂して、「トカゲは…」「カマキリは…」と解説しているそうです。

ですから江戸時代中期にはすでに、標準語といえますか、全国的呼び名として、あの小型爬虫類のことは「トカゲ」、頭が三角で腹がふくれていぼったように歩く昆虫のことは「カマキリ」ということが、知識人の間では既に定着していたものと推測されます。

しかし、ごく一般の庶民はそんなことは知る由もなかったと思われまふ。相変わらず、「カマギツチョんしっぽが取れても動ってた」とか「はらたちん子供がウヨウヨしてんがをめつけた」というような会話をしていたはずだ。

明治以降、全国民が学校に通うようになってからは、みんな家ではゴキブリのことを「平八」とか「わんくれ」と呼んでいても、学校に入れば、誰しもあの虫のことは標準語で言えばゴキブリだということを知ることになります。

しかし、江戸時代の庶民には、統一的にそのような頭の切替をする機会に出くわすことは、まずなかったことでしょう。

それでも、勤勉な日本人のことですから、いつのまにやら次第に、何やら、あのチョロチョロ動くのは、本当はトカゲっていうらしいぞとか、あの頭が三角な虫は、カマキリっていうのが本当らしいということが世間に広まっていったと思います。

そうして、100年が経ち、200年が経つうちに、カマギツチョの「カマ」とカマキリの「カマ」の一致、そして語尾のギツチョという、いかにも昆虫らしい響きから、混乱が始まり、「カマギツチョって、カマキリのことだっけ？」というような会話が続けられて行くうちに、いつしか「カマギツチョ」が、カマキリのことも指すようになったものと推測されます。

たぶんこんな経緯で、今でも「カマギツチョ」という呼び名は「トカゲ派」6割、「カマキリ派」4割という差があるのだと思います。

また、この混乱は更に混乱を呼び、トカゲのこともカマキリのことも両方とも「カマギツチョ」と呼ぶ地域もあるそうです。

## 8. 温故知新

このように、方言は単にローカル語として、聞き流すだけでなく、語源をたどれば、故事来歴の新たな発見があり、更に親しみが増し、古里に尚一層の愛着と誇りを感じることができるようになることと思いまふ。私の本のサブタイトルを「温故知新」としたのもそんな意味合からです。「古きをたずね、新しきを知る」。冒頭でお話したように、私の「ふじくらふじお」という名も、「ドラえもん」もどきの単におもしろい名ではなく、ののさんの名前からもらったものだと思えば、少なからず有難みもあり、誇りも感じまふ。

このように、古きをたずねれば、言葉にしる、名前にしる、きっと故事来歴があります。地名にしても同じです。蛇足になりますが、君津市の君津消防署のある地区は「杓師」という地名です。私の亡き母の実家のある所ですが、かつては、私たち一族は元より、その地域の人たちも、通常は「むくし」と呼んでいました。一般的に改まった席では「もくし」と言っていたので、子供の頃、私は、てっきり「むくし」は「もくし」がなまったのだらうと思っていました。ところが、叔父さんが実は「むくし」の方が本当だ、何かで調べてみろといったので、平凡社だったか？難読地名辞典でさ

がしてみたら、しっかり「むくし」と掲載されていました。今では、「もくし」とふりがなが付されてそれが正式な地名となり、「むくし」派は、ごく少数派となっていました。でも、そもそも元をたどれば「柰師」という漢字を誤読したとか、発音をなまったりとかの話ではなくて、逆に元々昔から地域の人々に呼ばれていた「むくし」という地名に、あとで便宜上「柰師」という漢字を宛てたのではないかと考えています。

続いて君津市の話で恐縮ですが、その「柰師」の隣の地区は「外箕輪」と言います。ジョイフル本田のあるところ。そして国道を挟んで隣の運動公園があるところは、「内箕輪」と言います。

今では、内も外も「箕輪」という、小櫃にも単独である地名と同じ漢字を使っていますが、旧八重原村生まれの我家のおふくろは生前、外箕輪は、元々そういう字だったが、内箕輪の「みの」の方は、本当は「蓑」だったはずだと言っていました。

私が調べた限り、町村合併で今の君津市になってからも、公文書が手書きだった時代には、その「内蓑輪」の字が使われていたようです。どうやら印刷が活字になってから、今の「箕輪」の字に統一されたように思います。その境は、区画整理後の「住居表示」にあったのではないかと私は推測しています。

明治、大正から昭和初期生まれの人にはその誇りがあって、頑固に「内蓑輪」の文字にこだわっていたように聞いていますが、現在ではその地区の当の住民でさえ、そんな話を知らない人がほとんどではないかと思えます。

そもそも「箕」とは本来、豆類などの殻やごみなどを取り除く竹製の農具のことですが、「蓑」は昔の雨合羽、今流にいうならレインコートのようなものことです。これほど意味の異なる地名を、行政が単に「音」を以て、統一してしまうのは、如何がなものかと思えます。全国で最も多い地名は「中村」で、その次が「新田」だそうです。その意味するところは、その文字からしてほしい想像がつかますが、どんな平凡な地名にしても、きっとそれなりの由来があるはず。そんなことを考えると、千葉県北部の方には、住所をイロハニで表示している自治体がありますが、もってのほかのことだと思っています。

とりとめのない方向に話が飛んでしまって恐縮ですが、私は、日々こんな温故知新を考えながら、言葉拾いという道楽のライフワークを続けております。

長時間に渡り、私のつたない話に、お付き合い戴き、誠にありがとうございました。

## ニコニコ BOX

原田雅式 親睦担当部長



小野恒靖 志波さんから写真をいただきました。

会報に嘉義南へのお土産が紹介されて

石井輝之 藤倉さんをお迎えして

栗原典子 //

白石幸久 //

榎本守男 //

渡辺 務 記念プレートを頂いて

合計 6,000円

## 出席報告

志波 克 出席担当部員

区分	会員数	出席	欠席	MUp	出席率
今回	31/26	18	7	3(1)	80.77%
前回	31/29	21	7	3(1)	82.76%
前々回	31/28	20	5	4(3)	85.71%

括弧内は出席規定免除者の MUp 内数

## 編集後記

今回の卓話は、聞いているときは長く感じなかったが活字にすると読みごたえがあります。プロフィールの著書の中に「謀反人たちの真相」が紹介されております。570ページにも及ぶ大作で大変興味深い内容です。是非ご一読を。 (すどう)